仮庵の祭りが近づいた時のイエス

ヨハネ福音書7:1-13
【新改訳2017】

7:1 その後、イエスはガリラヤを巡り続けられた。ユダヤ人たちがイエスを殺そうとしていたので、ユダヤを巡ろうとはされなかったからである。
7:2 時に、仮庵の祭りというユダヤ人の祭りが近づいていた。
7:3 そこで、イエスの兄弟たちがイエスに言った。「ここを去ってユダヤに行きなさい。そうすれば、弟子たちもあなたがしている働きを見ることができます。
7:4 自分で公の場に出ることを願いながら、隠れて事を行う人はいません。このようなことを行うのなら、自分を世に示しなさい。」
7:5 兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。
7:6 そこで、イエスは彼らに言われた。「わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも用意ができています。
7:7 世はあなたがたを憎むことができないが、わたしのことは憎んでいます。わたしが世について、その行いが悪いことを証ししているからです。
7:8 あなたがたは祭りに上って行きなさい。わたしはこの祭りに上って行きません。わたしの時はまだ満ちていないのです。」
7:9 こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。
7:10 しかし、兄弟たちが祭りに上って行った後で、イエスご自身も、表立ってではなく、いわば内密に上って行かれた。
7:11 ユダヤ人たちは祭りの場で、「あの人はどこにいるのか」と言って、イエスを捜していた。
7:12 群衆はイエスについて、小声でいろいろと話をしていた。ある人たちは「良い人だ」と言い、別の人たちは「違う。群衆を惑わしているのだ」と言っていた。
7:13 しかし、ユダヤ人たちを恐れたため、イエスについて公然と語る者はだれもいなかった。

【祈りながら考えよう】

（１）ユダヤの指導者たちがイエスを憎み、殺そうとするのはなぜですか。

（２）仮庵の祭りとは何を記念する祭りですか。その象徴的意味は何ですか。

（３）6節の「わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも用意ができています」とはどういう意味ですか。

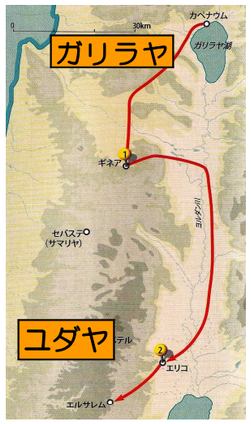
【解　説】

（１）なぜユダヤ人たちはイエスを殺そうとしていたのか

「その後、イエスはガリラヤを巡り続けられた。ユダヤ人たちがイエスを殺そうとしていたので、ユダヤを巡ろうとはされなかったからである。」（1節）

6章と7章の間には数ヶ月が経過している。イエスはガリラヤを巡り続けておられた。主はユダヤを巡ろうとはされなかった。ユダヤ人たちが、主を殺害しようとしていたからである。ここの「ユダヤ人たち」とはユダヤの指導者や支配者たちのことである。

指導者たちがキリストに対して抱いていたような敵意を、一般の人たちも抱いていたのではない。むしろ「大勢の群衆が、イエスの言われることを喜んで聞いていた」とある（マルコ12:37）。



イエスを殺そうという計画は、主が「ベテスダの池」（ヨハネ5章）で奇蹟をなされた時から、ユダヤ人たちが決めていたことのように思われる。奇蹟をなされたその日は安息日であったので、ユダヤ人たちの反感を買うこととなった。

ユダヤ人たちは安息日に許される労働とそうでないものとについて、39箇条に及ぶ規定を持っていた。その39箇条目によると、安息日に荷物を運ぶことは禁じられていた（「ミシュナ」シャッバス7:2）。従って、床を取り上げて歩いたこの男の行為は律法違反ということになった。

「そのためユダヤ人たちは、イエスを迫害し始めた。イエスが、安息日にこのようなことをしておられたからである。… そのためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っていただけでなく、神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされたからである」（ヨハネ5:16,18）

彼らはベテスダの池での主イエスの呼びかけに答えることもできず、そうかといって口を封ずることもできず、群衆がイエスの言われることを聞くのをやめさせることもできないでいた。それゆえ彼らはイエスを殺すことで解決しようとしたのである。

（２）仮庵の祭りとはどんな祭りですか

「時に、仮庵の祭りというユダヤ人の祭りが近づいていた。」（2節）

「仮庵の祭り」とは、ユダヤの暦の中の三大祭の1つである。この祭りは秋、収穫が終わった後、第7の月（太陽暦の9月から10月頃）に行われた（４頁のユダヤの暦と祭りの一覧表参照）。

ユダヤ人にとって、第７月の第1日はラッパを吹き鳴らして記念する日（レビ23:24）、10日は贖罪の日（レビ23:27-28）、そして、15日に、仮庵の祭りが始まる。

仮庵の祭りは、ユダヤ人の祖先がエジプトを出た後、荒野の旅をした時、天幕を張って生活した時の主の恵みを覚えるため、七日間、仮小屋か木の枝を張って作った天幕に住み、主の前で喜ぶよう定められていた（レビ23:39-43）。それは収穫感謝祭でもあり、ユダヤの祭りの中でも一番多くの「いけにえ」がささげられた（民数記29:12-36）。

その祭りの期間中は毎日、シロアムの池から水を汲んで運び、民がイザヤ12章を詠唱するのに合わせて、祭壇に注がれた。下記のヨハネ7章37-38節で言及される御言葉は、この行事を背景とした記述である。

「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、…その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」

過越の祭りはキリストの十字架の象徴であり、七週の祭りはキリストが摂理のうちに聖霊を下される象徴であり、仮庵の祭りはキリストが御自身の民を、喜びにあふれる１つの群に集めるために再び来られることの象徴である。

（３）イエスの兄弟たちもイエスを信じていなかった

そこで、イエスの兄弟たちがイエスに言った。「ここを去ってユダヤに行きなさい。そうすれば、弟子たちもあなたがしている働きを見ることができます。自分で公の場に出ることを願いながら、隠れて事を行う人はいません。このようなことを行うのなら、自分を世に示しなさい。」兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。（3-5節）

3節に登場する「イエスの兄弟たち」とは、イエスの誕生後マリヤに生まれた息子たちと思われる。しかし、主イエスにどれほど近い関係であったとしても、それで彼らが救われるわけではなかった。

彼らは、仮庵の祭りにユダヤへ行くよう、しきりにイエスに勧めた。「もっとたくさんの人が奇跡を見てくれる所へ行ったらどうですか。こんな所でくすぶっていても有名にはなれないよ。兄さんがそんなに偉い人だったら、世間の人に証明してみせなくては」（リビングバイブル訳）と。このことばは皮肉で語られたのかもしれない。

当時、主の兄弟たちはまだイエスをキリストであると信じていなかった。彼らは全く恵みを知らず回心もしていなかった。弟たちまでもが主のことばや主のわざを疑うのは、主にとって特別につらいことであったに違いない。

（４）「わたしの時」と「あなたがたの時」

そこで、イエスは彼らに言われた。「わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも用意ができています。世はあなたがたを憎むことができないが、わたしのことは憎んでいます。わたしが世について、その行いが悪いことを証ししているからです。あなたがたは祭りに上って行きなさい。わたしはこの祭りに上って行きません。わたしの時はまだ満ちていないのです。」

こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。しかし、兄弟たちが祭りに上って行った後で、イエスご自身も、表立ってではなく、いわば内密に上って行かれた。（6-10節）

上記の御言葉を意訳すると、主は兄弟たちに「わたしにとって、今はまだ、その時ではない。しかし、あなたがたはいつ行ってもいいのです。いつ行っても同じです。少しもユダヤ人指導者たちを刺激しないであろうし、危険な目にあうこともない。しかし、わたしは憎まれています。彼らの行いが悪いことを証ししているからです。あなたがただけで行きなさい。わたしは行く時が来たら行きます」と言われたようである。

兄弟たちが祭りに上って行った後、しばらくガリラヤにとどまっておられ、内密にユダヤに上って行かれた。

（５）キリストに関して意見が分かれる

ユダヤ人たちは祭りの場で、「あの人はどこにいるのか」と言って、イエスを捜していた。

群衆はイエスについて、小声でいろいろと話をしていた。ある人たちは「良い人だ」と言い、別の人たちは「違う。群衆を惑わしているのだ」と言っていた。しかし、ユダヤ人たちを恐れたため、イエスについて公然と語る者はだれもいなかった。

主が行う数々の奇跡により、主が本当はいかなるお方であるのか、人々はますます判断を迫られていた。祭りの時に、ひそかに人々の間で話題になっていたのは、はたして主が本物の預言者か、それとも偽者か、ということであった。ある人々は「良い人だ」と言ったが、別の人たちは「違う。群衆を惑わしているのだ」と言っていた。

年老いたシメオンが30年ほど前に語っていたことが、驚くべき方法でここに成就された。彼はマリアに次のように言った。

シメオンは両親を祝福し、母マリアに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れたり立ち上がったりするために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められています。…それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです。（ルカ2:34-35）

ユダヤ人たちの間で、キリストに関して意見が分かれたということから、このシメオンのことばが成就したことがわかる。イエスに対するユダヤ人指導者たちの反感は、今や非常に激しいものとなっていたため、だれも「公然と」

主を擁護することができないまでになっていた。一般民衆の多くが、主こそ「まことのイスラエルのメシヤ」である、と認めていたが、あえて前面に出てまでもそう言おうとはしなかった。指導者たちの迫害を恐れていたからである。

《参考資料》

【聖書時代の祭り】（Jバイブル・聖書の達人／いのちのことば社より抜粋）

この「祭り」という語は定められた時、所といった意味で、「主の」と限定されて、主の定めた時、聖なる期間、主の例祭の意味で用いられている。

五書に記されている祭り（**出エジプト23:14-19、レビ23章、民数28-29章、申命16:1-17**）の特徴は、

（1）主の祭りであり、人が決めたのでもなく、異教の民の習慣に倣ったものでもない。

（2）聖なる集会が召集され、まず主が礼拝され、聖書が読まれる。

（3）聖会が持たれる日は、すべての仕事（**安息日と贖罪の日**）またはすべての労働の仕事（**上記以外の祭りの時**）が禁じられ、安息を守ることが厳命されている。労役は罪ののろいの結果であり、安息は神の安息、天の安息の前味であり、その日を聖別して主とともに過すことでもある。

（4）祭にはそれぞれに、動物、穀物等のささげ物、ささげ方が規定されている（**民数28:9-29**）。すなわち、罪、神との和解が取り扱われる。

（5）どの祭りも神の創造、救い、贖い、摂理のみわざの特定のものを記念することが命じられ、そうすることにより神の恵みとあわれみとを具体的に覚えて喜び、賛美、感謝にあふれ喜んで神にささげ、心から祭りを楽しみ力を与えられる時となる（**Ⅱ歴代30:21-27、ネヘミヤ8章、イザヤ58:13-14**）。従って自然やその現象を神格化している異教の祭りとは全く意味を異にしている。

五書に記されている祭りは、安息日、過越、種を入れないパンの祭り、七週の祭り、ラッパを吹く日、贖罪の日、仮庵の祭りで、捕囚期以後に起源を持つのは、プリムの祭り及び宮きよめの祭りである。

イスラエル人にとって、これらの祭りへの参加は各自の自由ではなく特権であり義務であった。「あなたがたがどこに住んでいても、代々守るべき永遠のおきてである」（**レビ23:21**）と記されている通りである。またイスラエルの男子はみな年に3度、種を入れないパンの祭り、七週の祭り、仮庵の祭りに主の選ぶ場所で御前に出ることが命じられている（**申命16:16等**）。

祭りの守られ方には、政情、治安、信仰等の情況により盛衰はあったが（**Ⅱ歴代30:26、35:8、ネヘミヤ8:17**）、新約、特にヨハネによる福音書を見ると、人々が祭りのたびにエルサレムに上り、主も上られ、そのつど人々を教えておられることがわかる（**ヨハネ2，5，7，10，13章**）。エルサレム陥落後、神殿を失ってからは、ユダヤ教では、様々な祈祷がいけにえに代ってささげられている。祭りの日時に関しては、下記の図「ユダヤの暦と祭の一覧表」を参照されたい。

①過越の祭り

過越の祭り、種を入れないパンの祝（祭）。この二つの祭りは、まとめて過越の祭り、種を入れないパンの祭り、過越の祭りと言われる種を入れないパンの祭り、などと呼ばれているので、一つの項目で取り扱うことにする（**Ⅱ歴代8:13，ルカ2:41，43，22:1**）。

第1の月の14日夕に過越の小羊をほふり、その夜すなわち15日、種を入れないパンの祭りの第1日の夜に、その小羊を種を入れないパンと苦菜を添えて食する。これが過越で、種を入れないパンの祭りは15―21日の7日間で、その間、家中のパン種を全部取り除き、種を入れないパン・悩みのパンを食べなければならない。

また第1日目と第7日目には聖なる会合が召集され、すべて労働の仕事は禁じられ、安息を守らなければならない。また第1の安息の日の翌日に初穂の束を祭司のもとに携え、祭司はそれを主に向かって揺り動かすよう命じられている。

この祭りは、イスラエル人のエジプト脱出の夜、彼らが命令に従って門柱とかもいにつけた小羊の血を見て、主がその家の初子を打つことなく過ぎ越されたこと、その夜、彼らはその小羊を種を入れないパンと苦菜を添えて食し、また、まだ種を入れていない練り粉を鉢ごとかついで大急ぎで出立し、主の御手により救出されたことを記念し、子孫に伝えることを目的としている。

従ってイスラエル人にとり最も重要かつ喜ばしい祭りである。過越の小羊は、初め家族の大きさにより準備され、全集会が集ってほふり、それぞれの家族に分け、各自の家で食されたが（**出エジプト12章**）、カナン定着後は、主が選ぶ場所でほふり、食するよう定められ（**申命16:6**）、ユダのヨシヤ王の時にはその血が祭司たちにより祭壇に注がれ、肉は火で焼いて民の父祖の家ごとに組分けに従って分配されている（**Ⅱ歴代35:10 - 13**）。

この祭りは、旧約、新約を通じ、特に福音書には多くの言及がある。主の最後の晩餐は過越の食事であった。キリスト教会ではキリストこそ私たちの過越の小羊で、この羊は骨を折られず、3日目に死人の中からの初穂として復活されたこと、信者は古いパン種を取り除かれた新しい固まりとなったこと等がこの祭の予型の成就であるとして、主の受難を記念し復活を祝うという形になっている（**ヨハネ19:33，36、Ⅰコリント5:：7，8、15:20**）。

②七週の祭り

過越の祭りから満七週を経た翌日（50日目）。別名五旬節、ペンテコステ（**日数にすれば50日**）、初穂の刈り入れの祭り（**小麦の収穫時―出エジプト23:16**）。この祭りは1日だけで聖なる集会が召集され、労働の仕事はすべて禁じられ安息を守るべきことが定められている。

男子が主の前に出る三大祭の一つ。勤労を祝し、実りと喜びを与え、生命の支え主なる主への感謝と喜びのささげ物をささげる日である。旧約にはこの祭りの事例はないが、新約では使徒2章に、この日弟子たちが一つ所に集まっていた時、約束の聖霊が下り、弟子たちが他国のことばで話し出したことで大勢の人が集まり、語られる証しを聞いて、3千人という刈り入れが与えられ新約の教会が誕生した日である。

③仮庵の祭り

第7月の15日から7日間の祭りで、初日と8日目に聖なる集会が召集され、両日とも労働の仕事はすべて禁じられ全き休みを守る日。ちょうどぶどう、オリーブ、いちじく、その他もろもろの土の産物の収穫が終る時で、収穫祭とも呼ばれている（**出エジプト23:16**）。

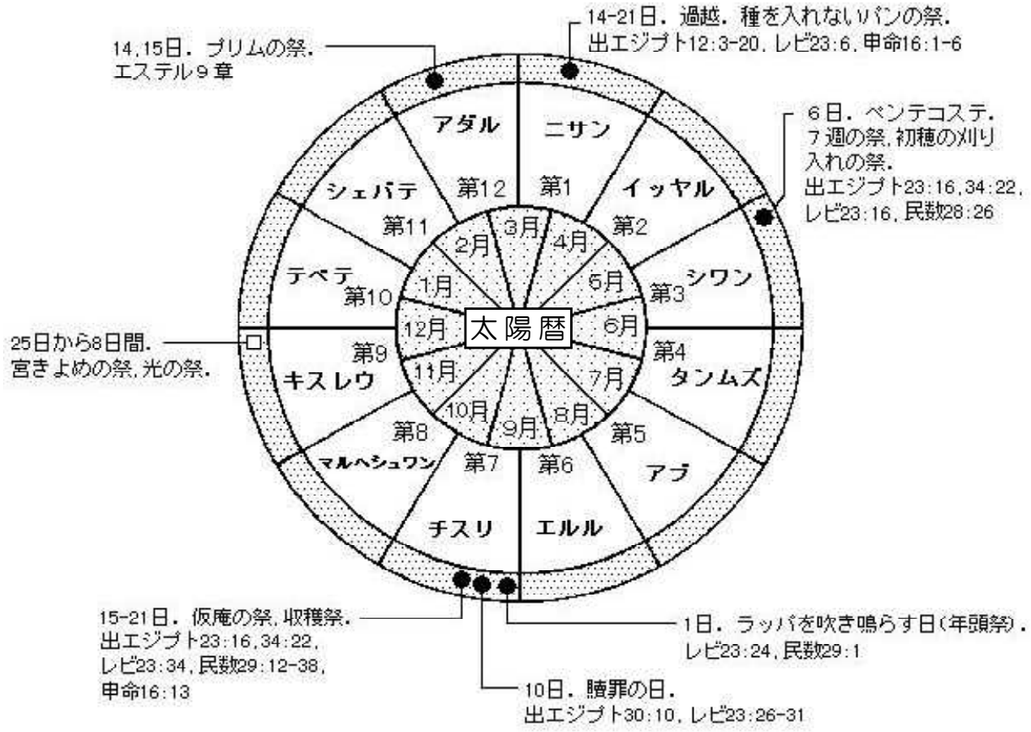
厳かな贖罪の日を終え、1年の収穫も全部終って身も心も軽く、最も楽しい感謝と喜びにあふれ、豊かにささげる祭りである。彼らは初日にいろいろな木の枝や葉で（**レビ23:40**）仮庵を作り、7日間仮庵に住み主の前に喜び祝い、また父祖たちの荒野での仮庵住いを後代に伝えるのを目的としている。

ネヘミヤ8：13-18には捕囚から帰った民がエズラの指揮のもとで守った仮庵の祭りの見事な記録がある。ヨハネ7：2，37-38ではイエスが、この祭りの終りの大いなる日に大声で民に語っておられる。

以上がモーセ五書に記されている主の祭りであり、以下の二つは捕囚期以後に起源を持つ祭りである。プリムの祭りの由来はエステル記に記されている。宮きよめの祭りの由来は外典のマカベア書に記されているが、ヨハネ10：22に言及がある。

④贖罪の日（補足）

第7月の10日で、この日はイスラエル人にとって最も厳粛な日である。1日だけで、一切の仕事が禁じられ、断食と全き安息を守らなければならない。折にふれ、罪や咎のためのいけにえがささげられているにもかかわらず、なおこの日大祭司が規定に従って大祭司、祭司、聖所、全会衆のために、年に1度至聖所にいけにえの血を携えて入り、御前に血を注いで贖いをする日である。

救いの歴史の上で最重要な予表の一つである。詳細についてはレビ16章を参照のこと。使徒27：9の「断食の季節」はこの日のことである。キリスト教会は「（キリストは）ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです」（ヘブル9：12）とあるように、キリストの死によって贖罪日は成就したと理解している。

《ユダヤの暦と祭りの一覧表》